

蛮勇を奮って使命を果せ

日本社会事業大学が産声をあげようとしていた頃、私が講座を引き継ぐことになる大内兵衛東京大学教授は、戦後の日本財政に決定的な影響を与えた「蛮勇演説」をラジオを通じて、国民に訴えていた。蛮勇を奮って債務を断てという蛮勇演説は、膨大な戦時債務を抱えた戦後日本の財政危機を、戦時債務を切り捨てることによって克服しようという主張である。いわば借金を踏み倒すという蛮勇を奮わなければ不可能な財政再建シナリオを提唱したのである。

破局か肯定的解決かの「岐れ路」を意味する「危機 (crisis)」から脱出するには、蛮勇を奮う覚悟が必要であることは、人間の歴史からの尊い教訓でもある。日本社会事業大学は現在、その研究教育が危機的狀態に苦悩している。というよりも、日本社会事業大学に限らず、真理の探究を使命とする日本の大学が、存在の「点」を喪失する危機に陥っているといつてよい。

その原因は誰もが理解している。それは日本の社会が「ミダスの呪い」に取り付かれているからである。小アジアのプリュギアの王ミダスの願いは、手に触れるものすべてが黄金に変わることであった。ところが、その願いが叶った時、ミダス王は恐るべき事実を知ることになる。それは口にすると手に触れると黄金になり、愛する娘に手を触れれば、黄金に変わってしまうからである。

「ミダスの呪い」に取り付かれた社会は、目的と手段とを取り違えた疎外された社会である。黄金は人間の生活に必要なものを手に入れる手段にしかすぎないのに、黄金を手に入れることを目的としたために、人間の生命活動である生活という本来の目的を見失ってしまったからである。

財政の目的は社会統合にある。社会の構成員の生活を保障するために、社会政策と表現される公共サービスを提供し、社会の構成員の生活を支える生産活動を機能させるために、経済政策と表現される公共サービスを供給することによって、財政は社会統合を図っていく。したがって、財政危機は財政収支が赤字になっている状態ではない。財政が有効に機能せずに、社会統合という使命を果せなくなっている状態である。

財政の収支尻を合わせることなど、いとも簡単である。増税か借金によって収入を増加させるか、経費を削減すれば実現できるからである。しかし、増税や経費削減によって、財政収支を合わせたところで、社会的危機や経済的危機が噴出し、社会的統合が不可能になれば、財政危機は深刻化したことになる。

大内兵衛先生の「蛮勇演説」も、戦時債務を断つことによって、財政を有効に機能させることによって、戦後の社会的危機や経済的危機を克服することを意図している。ところが、「ミダスの呪い」に取り付かれると、果さなければならない使命は、忘却の彼方に忘れ去られ、手段にすぎない財政収支の帳尻合わせだけを追求されることになる。

日本社会事業大学の使命は、第二次大戦後の深刻化した社会的危機に、研究教育活動を通じて対処するという建学の経緯が雄弁に物語るように、社会福祉学の研究教育をリードすることによって、社会的危機の迷宮から脱出する道案内をすることにある。この使命こそ、日本社会事業大学の「点」である。「点」には長さも面積もなく、ただ位置だけを示している。物事には必ず、そのものをそのものたらしめている「点」がある。妥協は必要だけれども、それは「点」を失わない限りにおいて実施するもので、「点」を失うような妥協は、妥協ではないのである。

しかし、日本社会事業大学も「ミダスの呪い」に取り付かれている。大学の財務運営は、大学の使命を果すことを目的として運営されなければならない。ところが、「ミダスの呪い」に取り付かれると、収支バランスを取るためどころか、収支バランスの黒字幅を拡大することに目を奪われた財務運営がなされてしまう。日本社会事業大学の果すべき使命をも忘れ、ただ業績のための経費削減がされていくことになる。

使命を忘れた財務運営は、利潤を追求する民間企業でもありえない。民間企業がその使命とする事業活動それ自体が遂行できなくなるからである。収支バランスが黒字であっても倒産する「黒字倒産」も存在することを忘れてはならないのである。

日本社会事業大学は蛮勇を奮って大学運営の舵を使命志向へと切り換えなければならない。「不易流行」という蕉風俳諧の理念に従えば、日本社会事業大学の使命である「点」は建学以来、変わることがないけれども、現在の新しい状況では現象形態は変化する。というよりも、新しい社会問題が蘇生している現状を見極めれば、日本社会事業大学は新しい状況での社会福祉学の再創造を目指して、敢えて蛮勇を奮い、船出をしなければならないのである。